

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：23803

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10333

研究課題名(和文)脳血管疾患患者の早期在宅移行を支える包括的継続的シームレス支援に関する研究

研究課題名(英文)Research on comprehensive and continuous seamless support to support early home transition of patients with cerebrovascular disease

研究代表者

林 みよ子 (Hayashi, Miyoko)

静岡県立大学・看護学部・教授

研究者番号：50362380

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、脳血管疾患患者と家族に対する在宅移行支援の実態を明らかにし、急性期から在宅移行期までの在宅移行支援プログラムを開発することを目的とした。看護師が行う在宅移行支援に関する質問紙調査、急性期の看護師が行う退院支援のインタビュー調査と若手看護師育成の介入研究を実施した。その結果から、急性期から看護師が実施する退院支援を継続するために、患者や家族の望む生活に沿うこと、家族が介護者となることを受け入れられるまで寄り添い続けることを中心とするプログラム案が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

在宅医療が推進され、在院期間が短縮化されている現在、脳血管疾患患者は転棟や転院を何度も経験することから、どのように在宅移行支援が継続されるかが課題となる。急性期病院と在宅移行期に退院支援に関する先行研究は多いが、継続性に焦点を当てた研究は見当たらなかった。本研究は、発症急性期から始まる在宅移行支援を明らかにし、回復期に至るまでの支援プログラム案を提示した。この成果は、脳血管疾患患者と家族がともに生きていくことを実現することに貢献する。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to elucidate the current trends in hospital-to-home transitional care support for patients with cerebrovascular disease and their families, and to develop a hospital-to-home transitional care support program covering from the acute phase to the transitional care phase. A questionnaire survey on nurses' hospital-to-home transitional care support, an interview survey on discharge support provided by acute care nurses, and an intervention study on training young nurses were conducted. The results led to proposing a program to allow consistent discharge support provided by nurses from the acute phase, focusing on being supportive of the patients' and their families' needs for the favorable quality of life and staying close to the family until they reach acceptance of becoming caregivers.

研究分野：看護学

キーワード：在宅移行支援 脳血管疾患 シームレス

### 1. 研究開始当初の背景

脳血管疾患は、突然に発症し、何らかの永続的な後遺症を残すことの多い疾患である。脳血管疾患患者に対する治療は、発症急性期の生命維持から運動機能や日常生活行動の回復を目指したりリハビリテーションまで長期に渡る。

一方で、わが国では、いわゆる 2025 年問題に対応すべく、厚生労働省は、在宅医療を推進しており、在院期間の短縮化が加速化している。先行研究で脳血管疾患患者の家族は、介護準備状態が十分に整わないままに退院しているという報告があることから考えると、在宅介護という脳血管疾患患者の家族の重大な決断を支えるためには、介護役割を受け入れることや介護スキルの獲得、自宅環境などさまざまな準備を整える必要があり、そのためには、入院初期から患者の身体状態や家族の受け入れ状況などの変化に伴って段階的かつ継続的な関わりが重要である。

しかし、退院支援に関する研究の多くは、在宅移行期や在宅介護実施期が中心で、急性期からの支援や看護師の連続的な支援にはほとんど注目されておらず、その実態も明らかではない。今後ますます包括的な地域医療システム構築が推進される今、入院早期から連続する包括的な在宅移行支援を確立する必要があると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、脳血管疾患患者と家族に対する在宅移行支援の実態を明らかにし、急性期から在宅移行期まで連続する在宅移行看護支援を組み込んだ多職種連携在宅移行支援プログラムを開発することである。

### 3. 研究の方法

(1) 脳血管疾患患者・家族に対する看護師が実施する在宅移行支援の実態について、全国から無作為に抽出した臨床経験 10 年以上かつ脳血管疾患患者・家族看護経験 3 年以上の看護師を対象に質問紙調査を行った

(2) 急性期病院における脳血管疾患患者の家族に対する看護師の退院支援の実態について、脳血管疾患患者・家族看護経験 10 年以上の看護師 10 名を対象に、インタビュー調査を行った。

(3) 継続的な構造化デブリーフィングによる SCU 若手看護師の在宅移行支援の変化について、卒後 1 年もしくは 2 年経った SCU 看護師 6 名を対象に、1 年間の介入研究を行った。

### 4. 研究成果

#### (1) 脳血管疾患患者・家族に対する看護師が実施する在宅移行支援の実態

全国から無作為に抽出した施設から 282 名(急性期病棟 22.2%、一般病棟 57.5%、回復期リハビリテーション病棟 17.1%、無回答 3.2%)から回答があった。多くの看護師は、部署間の連携を行っていると回答し、入院早期はリハビリテーションスタッフ、退院前は、訪問看護師と特に連携していると回答した。また、退院に向けた支援として、「患者の身体状態の安定」「患者の日常生活行動自立の促進」「患者の自宅退院希望の確認」「患者の自宅退院可能性の検討」「家族の在宅介護機能の確認」の実施度が高く、所属部署によって実施する支援に違いはあったが、有意な差はなかった。一方、約 70%が在宅移行支援に課題があると回答し、その内容として、「看護師の在宅移行支援への関心や意識の低さ」「看護師の在宅移行支援の知識や経験の不足」「看護師の在宅生活のイメージ不足」を挙げる者が多く、他に「家族の協力不足」「患者の状態に対する家族の認識不足」も挙げられた。これらのことから、急性期から回復期まで、看護師は他部署の看護師や他職種と連携して、患者の身体状態改善や日常生活拡大支援を中心に在宅移行支援をしていることが明らかとなった。そして、在宅移行支援の実施や強化のためには、在宅移行支援の知識や経験の少ない急性期病棟の看護師、在宅生活イメージがしづらい若手看護師の支援が必要であることが示唆された。

#### (2) 急性期病院における脳血管疾患患者の家族に対する熟練看護師の退院支援

看護師は、患者の病状が安定するとまず、発症前の生活を確認して患者や家族が望む生活・人生を捉え、その実現のために必要な援助をその家族にとって最適なタイミングを見計らって、関係する多職種の専門的な知恵を集結させてより良い援助を実施していた。看護師は、その時々患者の身体状態と家族の心理状態から「今こここまでできる」ことを判断していた。また、看護師は、患者や家族の生活を、毎日の生活という視点と人生という視点から、そして、専門職者の視点と生活者の視点から捉えて得た情報を総合的に判断して、患者や家族の望む人生を叶えるための今の状態・状況に適した現実的な支援をしていた。これらのことから、急性期における看護師の退院支援は、退院支援という特別な援助ではなく、患者や

家族の将来や日常生活に必要な援助を継続した先にあるものであると考えられた。そして、こういった支援を実施するには、心から患者や家族に向き合い、退院後の生活に関心を寄せる姿勢が根底にあると推測された。このような看護師は退院支援として意識していない支援を意識化して転棟・転院時の申し送りとして記録する必要がある。

#### (3) 継続的な構造化デブリーフィングによる SCU 若手看護師の在宅移行支援の変化

看護師は、患者の身体状態以外に考える余裕がなかった新人時代から、先輩看護師に受けた助言を実践して患者の元の生活や家族に目を向けるようになり、患者や家族の希望する生活を捉えるとともに今後の生活を予測し、それを実現するために他職種と調整するようになった。看護師は、定期的に在宅移行支援に関する自己の実践を振り返り、語ることによって、できない自分に対する厳しい評価から、先輩看護師の実践へと視野を拡大し、先輩看護師の実践とその意味を考え、先輩看護師に見守られる安心できる環境下で、彼らを真似て実践することで、在宅移行支援の方法を実践的に理解し、自信が持てるように変化したと考えられた。このことから、若手看護師は、次第に家族や在宅に目を向けるようになるが、日々の実践の中で先輩看護師の在宅移行支援を目にすることやその実践の支援が受けられる環境がより良い在宅移行支援の実践を促進することが示唆された。

#### (4) 脳血管疾患患者・家族のシームレスな多職種連携在宅移行支援プログラムの検討

脳卒中地域連携パスが導入され、急性期から積極的に退院支援が行われる。しかし、家族の多くは、現状が受け入れられない、患者がどこまで回復するかわからない、という思いを抱えており、在宅移行支援のルールに乗れないまま、状況だけが進められることもあり得る。脳血管疾患患者の在宅移行支援において、患者や家族の気持ちや生活に焦点を当てた看護師の支援が重要である。

急性期では、患者・家族の心理的混乱を安定させることが看護師の重要な役割である。特に、家族が後遺症を持った患者の介護者となることを受け入れるには時間がかかり、受け入れられるまでは在宅移行支援は進められない。看護師は、積極的に家族と話す機会を持って家族の揺れ動く思いに寄り添い、患者の日常生活行動の自立度を高めながら、入院前の家族の状況や生活、患者や家族の今の気持ちを捉え、良いタイミングで介護や退院という話題に触れ、家族の関係性・強み・介護力を判断し始める。

回復期では、先行研究から、退院や在宅介護が具体的になることによる家族の不安が高まり、在宅介護に迷いを感じる時期と考えられる。退院・在宅介護に進めるのではなく、家族の気持ちも同じ方向に向かっているのか、常に確認する必要がある。

シームレスな退院支援のためには、いっけん退院支援と直結しないと思える看護師の関わりや患者・家族の反応も意図的にカルテ等に記録することが必要である。また、急性期に関わる看護師は、在宅移行支援経験が少ないことも多いことから、在宅移行支援に関する教育を行うことが必須である。On the Job Training が不可欠で、経験のある看護師が良い実践モデルとして自分の実践を見せること、若手看護師が理解した退院支援を実践できる場を提供すること、若手看護師が行なった退院支援を先輩看護師と一緒に振り返り今後の実践を考える機会を作ることが効果的であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 林みよ子、白井千春	4. 巻 8
2. 論文標題 急性期・亜急性期にある脳血管疾患患者の家族の抱く病気に関する不確かさ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 天理医療大学紀要	6. 最初と最後の頁 27-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 林みよ子、松井利江、白井千春、大仲陽子
2. 発表標題 継続的なStructured debriefingがSCU若手看護師の早期在宅移行に向けた家族看護実践に与える影響
3. 学会等名 第47回日本脳神経看護研究会学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 林みよ子
2. 発表標題 脳血管疾患患者家族の病気の不確かさの急性期から亜急性期の変化
3. 学会等名 第15回日本クリティカルケア看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林みよ子
2. 発表標題 看護師が行う脳血管疾患患者の在宅移行支援の実態
3. 学会等名 第46回日本脳神経看護研究会学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Miyoko HAYASHI、Rie Matsui
2. 発表標題 Status of Transitional Care Support for Patients with Stroke in Japan
3. 学会等名 23th East Asian Forum of Nursing Scholars (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------